

しらかべ



創立100周年ロゴマーク

2016年3月18日 人権・同和教育部発行

春暖の候、保護者の皆さま方におかれましてはご健勝のことと存じます。今年度、本校の人権・同和教育にご理解とご協力をいただき厚くお礼申し上げます。そして、「しらかべ」をお読みいただいた感想や本校の人権・同和教育の取り組みについてのご意見などについて、懇談などで返信いただき、ありがとうございました。来年度も変わらぬご理解とご協力をよろしくお願いいたします。



東日本大震災から5年

東日本大震災が発生してから、5年が経ちました。いまだに、全国でおよそ174,000人が避難生活を余儀なくされ、復興がなかなか進んでいません。しかし、香川県で生活していると震災の関心が薄れていています。乙武洋匡さんの著書「希望 僕たちが被災地で考えたこと」には、乙武さんが震災直後に、被災地に行き、被災者の前向き・後ろ向きな本音や震災を通して自分の障がいについて改めて思ったこと、被災地に見えた希望の光などが語られています。この本を読んだ生徒の感想の一部を以下に、紹介します。

乙武さんは石巻市立大川小学校を訪れた。この小学校では8割近くの人が津波にのまれた。乙武さんは、残された2割の子どもたちに対して、「生きているのが、つらい。そんな思いで日々を過ごしている子もいるだろうが、生きて、生きて、生きぬいてほしい」と語っている。私は、この文章を読んで、本当に自然と涙がでてきた。まだ、小学生の子どもが友だちも家族も家も失ったのに対して、私は何不自由なく平凡で幸せに生活している。このどうしようもない現実が、ただただ辛かった。もし私が、被災者だったら、こんな言葉をかけられて前向きになれただろうか。きっと悲しみが大きすぎて、素直に聞き入れられないと思う。しかし、そんな子どもたちに対して今私は、ただ乙武さんとおなじような願いを持ち続けたい。そして、東北から離れたこの場所で、亡くなった人たちの分まで今を精一杯生きることが義務だと思う。毎日学校へ通えること、家に帰ってご飯を食べられること、ささいなことを友だちや家族と話せること。すべて奇跡のようなことだった。このことを少しでも多くの人が気付き、一生懸命に生きるべきだと強く思う。……

この本が出版されたのは、2011年の夏。あの日からメディアでの報道はどんどん減ってしまった。そのため、どのくらい復興したのか分からなくなり、人々の関心が薄くなっていく。目に見えてわかる東北の人たちが忘れられていく現状が悲しくてたまらない。被災していない人には、せめて東北への関心を持ち続け、現状を少しでも知ってほしいと思う。乙武さんは被災地で出会った人々と別れるとき、「必ずまた会いましょう」と口にしたそう。それは、「被災者にとって少しでも未来を感じられる言葉にしたかった」から。私も必ず被災地に行き、自分にできることを見つけたい。それが、直接的に復興につながっていないとしても、地元の人と交流して行事に参加したり、お話を聞いたり日常的でないことをしたいと思う。そんな小さなことが、被災地の方の希望の光になってほしい。

今、目の前にあるたくさんの日常がいかにか有難いことかを改めて考えさせられます。大切なのは、いつも通りの毎日に感謝する気持ちを忘れないこと、そして、被災者の思いに寄り添うこと…。

<1年生3学期の取り組み>

(1) ～障がい者を取りまく問題について考える～

1月13日、香川県立盲学校から4名の先生をお迎えして、障がい者を取りまく問題について学びました。前半は、「視覚障がい者について知ってほしいこと」という題で、講話をしていただきました。私たちは日常で大部分の情報を視覚から取り込んでいること、視覚障害にも様々な症状があること、視覚障がい者が困った時に発するサインなど、知らなかった情報をたくさん得ることができました。後半は、点字の読み方を学んだり、アイマスクをして、友人の手引きを頼りに歩いてみる実技体験を行いました。



手引き体験の様子

この学習で生徒が書いた主な感想（一部抜粋）を以下に紹介します。

- 今日の講演会を通して学んだことは、目に不自由なく生きられることはとても幸せなことだということです。同じことをスムーズに行うためにはみんなの手助けが必要ということがわかりました。一つ忘れてはならないのは、体が不自由な人も僕たちと同じだということです。僕たちは障がい者への偏見を捨て、ともに暮らしていかなければなりません。
- 何の不自由なく、目が見える私たちは幸せだと思うのは、少し違うのでは？と考えます。その人一人ひとりに幸せがあるからです。それを前提として、助け合いをしていかなければならないと思います。
- 人の情報の8割が眼から入っていると知り驚きました。100人いれば100通りの見え方があるという言葉が印象に残っています。
- 手引きの保護者が担う役割は計り知れないと気づきました。アイマスク体験の時、恐ろしくて歩く勇気がなかなかでませんでした。友達の手を信じて一步を踏み出しました。また、視覚がシャットアウトされた分聴覚が敏感になり、すべての音ははっきり聞こえてしまいました。「自分に言われているのかが分からない」とお話しされていたように、移動だけではない苦労があることが、少しわかった気がします。もし困っている方を見かけたら何かお手伝いしたいし、困っていることに気付くためにも、周囲へのアンテナを張り巡らせることを心がけたいです。

今回のLHRは体験を重視した活動となりました。アイマスクを着用するなどして疑似体験することで、視覚障害があることは、いかに不便で不安であるかを実感し、視覚障がい者が安全で安心して暮らせるためには、自分が具体的にどのように手を差し伸べればよいかということにまで、思い至ることができた生徒も多かったようです。また、自分の感じた思いや、盲学校の先生方のお話を聞いて新たに得た知識を、身近な人に発信しようとする生徒がいたこともうれしいことでした。障がいのある方がたへの思いやりや気づきの機会が増えるように、また必要な時に適切な対応がとれるように心がけてくれたらと思います。

(2) ～インターネットと人権～

1月20日は、「あの空の向こうに」というDVDを視聴し、インターネットの正しい使い方やルール、モラルなどについて考えました。生徒にとってインターネット利用は日常となっています。だからこそ、身近な問題として捉え、あまりに依存しすぎて大事なものを見失ってはいないか、誰かを傷つけるような使い方をしていないか、など自らの生活を振り返りました。

この学習で生徒が書いた主な感想（一部抜粋）をご紹介します。

- インターネットはすごく身近で他人事ではないと思った。私もインターネットによって家族と顔を合わす時間が減ったと思う。どこにいるかわからない人とつながれる反面、一番身近な人とのつながりが薄れてしまうのはだめだと思った。直接のかかわりを大切にして、インターネット上のうわべだけの付き合いがないように心がけたい。
- 軽い気持ちで載せたブログの写真が原因で大変なことになる。世界中に発信されているということを理解しなければならない。ネットの書き込みが原因で引きこもりや自殺の原因になることがある。きちんと理解したうえで、インターネットを有効活用したい。

1年間ありがとうございました。来年度も人権・同和教育の学習をしっかりと続けていきます。